

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第210号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2022年12月21日

カンムリカイツブリの幼鳥



2022. 9.25 宮島沼（美唄市）

撮影者 高 島 均（札幌市清田区）



も く じ

<礼文島> 鳥観察日誌 2022年に確認した希少種

宗谷管内礼文町 宮本 誠一郎 2

【私の探鳥地】

旭山記念公園 都心に近い森に117種の野鳥

札幌市公園緑化協会旭山記念公園職員 皆川 昌人 4

【私の鳥見スタイル】

「車中泊 探鳥旅行」まだ見ぬ野鳥との出会いを求めて

恵庭市 近藤 章子 6

【バードウォッチャーズ・スケッチブック】

鬼平鳥見帳 ^{ひわ} 鷗の正体 マヒワ、カワラヒワ、ベニヒワ

札幌市中央区 本間 康裕 8

札幌市内 毎年観察されるキマユムシクイ

北大野鳥研究会 千葉 利久・内田 耕平・和賀 大樹・川森 日向 10

探鳥会ほうこく 11

探鳥会あんない 鳥民だより 16

表紙の鳥 札幌市清田区 高島 均 16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

<礼文島> 鳥観察日誌

2022年に確認した希少種

宗谷管内礼文町 宮本 誠一郎

礼文島は日本海に浮かぶ最北の島であるため、春秋の渡りの時期には大陸からの迷鳥が数多く確認されています。私は1996年から島で観察された鳥を記録、2021年12月までに305種の野鳥を記録しました。

今年、2022年にも希少な鳥が観察できたので、この紙面で紹介させていただきます。

<4月 シラガホオジロの観察>

4月25日は早朝から天気が良く、利尻島が綺麗に見える1日だった。気温も5.1℃～12.9℃と暖かく風も割合穏やかだった。

この日、シラガホオジロは沼ノ沢農道と礼文空港線の幌泊側入口付近で観察できた。

沼ノ沢農道では10時30分ごろ、車で通過中に道路脇から数羽が飛び立ち、オノエヤナギの木の枝に紛れて見失った。

幌泊ではツグミ、ヒバリ、イソヒヨドリ、カシラダカなども観察され、14時10分ごろ道路脇の枯れ草の中で採餌する様子が観察できた(写真1)。



写真1. シラガホオジロ(雄)
2022. 4.25 礼文町船泊村幌泊 筆者撮影

<5月 マダラチュウヒの観察>

5月9日は晴れていたが、南風が強くて日中でも気温が11℃までしか上がらず寒い1日だった。15時15分過ぎに久種湖から南下する沼ノ沢農道の駐車場で東側の元の牧草地方向を眺めていると、100mほど先に猛禽類の飛翔が見られた。

全体が白い羽に初列風切の黒い羽が目立つ。双眼鏡で眺めると雨覆の黒い錨型の模様が確認できた。

野鳥の調査に来ているO氏とT氏に連絡して、観察を続ける。草原の上空を低く飛びながら、ヤチネズミでも探している様子で、時々姿が見えなくなる。やがてトビがやってきてナワバリ争いをする様子が見られた。何枚も写真を撮るが遠すぎて、後方の林に焦点を持っていかれてピントがうまく合わない。

やがてO氏、その後T氏が合流してマダラチュウヒ(写真2)と確認してもらい、私は現場を後にした。翌10日も確認。その後17日にも同じ沼ノ沢農道で確認した。

マダラチュウヒは2017年5月4日～9日に礼文島で初めて観察され、2019年5月4日～7日沼ノ沢農道、2021年5月4日には須古頓でも観察されている。



写真2. マダラチュウヒ(雄)
2022. 5. 9 礼文町船泊村 沼ノ沢農道 筆者撮影

<6月 礼文島で初めてのカラシラサギ>

6月12日 13時47分、ベンサシの海岸で「カラシラサギ」を確認したと「礼文しぜん調査」の村上賢治氏から着信があった。それは珍しいとすぐに車で車道の行き止まりまで行った。

車を降りて村上氏の案内で海岸を眺めると「白鷺」が1羽見えた。望遠鏡で拡大して眺めると海岸の岩の上から海中の小魚を狙っている様子で、比べる鳥が近くにいなかったため大きさはよくわからなかった。

しばらく眺めていると岩から岩へ移動の際、後頭に房状の冠羽があり、足指が黄色いのが確認できた(写真3)。10日から雨がちの天気が続いていて、当日は午前中に小雨が降り、午後は曇、気温は10℃以下で寒かった。東北東の風が強く吹いていたが、現地は南西向きの海岸で風は割合穏やかだった。風を避けて現地の海岸に避難していたと思われる。

礼文島での確認は初めてだったが、2000年5月11日に利尻島でも確認されている。



写真3. カラシラサギ
2022. 6.12 礼文町香深村知床 ベンサシ海岸 筆者撮影

<10月 姿を見るのがまれなウズラ>

鳥仲間の柳谷麻里世氏が10月8日14時30分ごろ、沼ノ沢農道を南下して赤岩方面に車で向かっていると、道路脇に丸まっていたウズラ2羽(写真4)を発見。「通り過ぎてから振り向いて写真を撮る5枚撮影」「その後走り去ってしまい、走り去る姿はクイナみたいだった」とのこと。

8日は最低気温が6.6℃で午前中にわか雨が降り、午後から晴れてきた。雨上がりの農道で採餌中だったのではないかと思う。

「北海道野鳥図鑑 2003 亜細亜社」によれば、「かつては全道で広く繁殖していたと思われるが、近年著しく減少し、姿の見られなくなった地域が多い」とある。礼文島も過去に記録があるが、姿を見るのはとてもまれで、私は2019年10月23日に島北部のゴロタ岬で足元から飛び去り、草原に潜る姿を目撃したことがあったが、写真撮影には至らなかった。柳谷氏の写真は貴重な記録となった。



写真4. 道路脇にいたウズラ2羽
2022.10. 8 礼文町船泊村 沼ノ沢農道 柳谷麻里世氏撮影

私の探鳥地 旭山記念公園

都心に近い森に117種の野鳥

札幌市公園緑化協会旭山記念公園職員 皆 川 昌 人

＜増えたバードウォッチャー＞

私が20年以上野鳥観察を続け、現在は職員として携わっているのが札幌市の旭山記念公園です。札幌市中心部の南西約3kmに位置する広さ約21haの公園です。藻岩山のふもとに位置するハゲ山だった場所が、札幌市開基100年を記念する公園として整備され、1970（昭和45）年に開園しました。

園内は約7割が森林です。公園造成時に市民植樹された人工林が主で、沢沿いなどに自然度が高めの二次林があります。園内には休憩所としても利用できる活動拠点「森の家」があります。ほかには展望台や大規模な石段、噴水などの修景施設、草地の広場、駐車場が2か所あります。

以前より夜景スポットとして親しまれてきましたが、2015年ごろまでは野鳥観察する人はごく少なく、春の夏鳥渡来シーズンに何人か来る程度でした。

それが、シマエナガブームが起こった2016年秋以降、都心から近いこともあって急激に野鳥観察・撮影者が増えました。今では平日も含め多くの人を訪れ、亜種シマエナガ（写真1）がよく見られる12月から2月には、特に撮影者が増えます。



写真1. 亜種シマエナガ 2019.1.3

藻岩山登山道旭山記念公園コースの入口でもあり、登山者も10年前より増えた感があります。また、元日には初日の出を拝む人で賑わいます。天然記念物である藻岩山との間には自然林として残されている札幌市旭山都市環境林があり（約16ha）、旭山の野鳥情報にはそこでの記録も含まれています。

＜クマゲラの森に117種の野鳥＞

旭山では上空通過も含め今まで一度でも観察された野鳥は117種（2022年10月1日現在）、そのうち毎年同じ時期に見られる野鳥は短期滞在も含め75～80種です。

森林性の一般的な鳥類はひと通り見られますが、草原性の野鳥は渡りの時期にノビタキなど数種が見られるのみです。大きな水場がないため基本的に水辺の鳥は見られません。クマゲラ（写真2）が見られ、特に冬は毎日

のように飛んで来て、間近で観察する機会もあるのが旭山の特徴でしょうか。ほかのキツツキ類もよく見られます。

旭山では冬だけ見られる主な野鳥はツグミ、ヒレンジャク、キクイタダキ（写真3）、キバシリ、亜種ミヤマカケス、ミソサザイ、マヒワ、ベニヒワ（写真4）、ウソ、シメなどです。



写真2. クマゲラ 2021. 7. 6



写真3. キクイタダキ 2019.2.24



写真4. ベニヒワ 2021.1.20

旭山記念公園では夏鳥の初認日を毎年記録しており、例えばホオジロ2022年は4月4日、過去10年で最早は3月22日、最遅4月5日、ウグイス2022年は4月10日、最早4月7日、最遅4月21日、キビタキ2022年は5月3日、最早5月1日、最遅5月10日、といったところです。

春か秋に見られる主な野鳥はルリビタキ、マミチャジナイ、ビンズイ、ムギマキ、オオムシクイなどです。

野鳥以外ではエゾリスを毎日見かけ、3年ほど前からエゾシカも頻繁に見られるようになりました。

＜野鳥観察会などの実施と自然情報の発信＞

旭山記念公園では毎月、野鳥観察会（写真5）を行っており、以前は月1回でしたが、参加希望者が増えたため2019年から月2回に増やし、さらに5月には毎週開催しています。

野鳥観察会にはボランティアスタッフも帯同し、観察会以外の日も含め、野鳥を通しての人々との交流を楽しんでいます。

ほかに5月から9月に野鳥以外を主とした自然観察会、秋にバードウォッチャーのための樹木観察会、冬にはスノーシュー自然観察会も行っています。



写真5. 毎月開催する野鳥観察会



写真6. 自然情報を発信する活動拠点「森の家」

旭山記念公園「森の家」（写真6）は、毎週金曜日にホームページで1週間の野鳥情報を上げ、秋から春にはシマエナガ出没マップを作成するなど、自然情報を発信しています。

旭山で見られる主な野鳥や昆虫、花を写真で紹介した「旭山自然ガイドマップ」も1部200円で販売しています。

また、シマエナガグッズや他の品も販売していて、絵

はがき、シマエナガ置物、ガチャガチャの缶バッチ、ビーズストラップなどがあります（写真7）。



写真7. 旭山自然ガイドブックと公園グッズ

野鳥観察地としての旭山記念公園の魅力は、高低差があって野鳥を目線の高さや見下ろしで観察できることです。亜種シマエナガが目の前で撮れる機会もあります。また、広すぎず狭すぎず、観察ポイントも点在していて観察しやすい場所です。午前中いっぱい歩き回るといい運動にもなります。

園内には札幌で暮らしていた俳人寺田京子の句碑があり、「日の鷹がとぶ骨片となるまで飛ぶ」という句が刻まれています。オオタカやハイタカを見ると、まさにここで詠まれた句なのではと想像します。

個人的に特に好きな野鳥はアカゲラとゴジュウカラで、それらが多く見られるのも旭山記念公園の魅力です。ほかにコサメビタキ（写真8）、ウソ、キバシリは近くで撮影できるととりわけ嬉しい野鳥です。



写真8. コサメビタキの幼鳥 2021.8.1

今後、旭山記念公園の野鳥リストが117種からどこまで増えるのか、増えるとすればどの野鳥か、いつ現れるか、などと少しの期待を持ちつつ日々観察しています。ちなみに最新の117種目は今年2022年の8月のヨタカでした。

野鳥の動きではほかに、例年5月に数日見られるだけのニュウナイスズメや、初夏にしばしば見られるものの、巣は確認されていないコムドリが旭山記念公園でも繁殖するようになるのかも注目しています。

旭山記念公園が、ちょっとした時間に気軽に行ける探鳥地、野鳥観察入門の場所として広く親しまれる場所になればと思います。駆け足での紹介になりましたが、ぜひ一度野鳥観察にお越しいただき、ゆっくりとしたひとときをお過ごしください。

私の鳥見スタイル

「車中泊 探鳥旅行」まだ見ぬ野鳥との出会いを求めて

恵庭市 近 藤 章 子

＜車中泊の始まり＞

北海道野鳥愛護会に入会した理由は、宿泊探鳥旅行に参加できるからでした。道央では見られない野鳥が道北では見ることができる、まれに1羽しか見られなくても、道東では群れている。そんな話を聞き、遠出をすれば会いたい野鳥に会える、是非会いたい。そんな思いから始まった車中泊探鳥旅行。先輩や仲間から野鳥の情報や車中泊の心得・アドバイスをいただき、まずは近間の旭川、後志管内寿都町、渡島管内八雲町から始め、函館、稚内、根室管内別海町と距離を伸ばしてきました。

実施するにあたり、車内に目隠し用のカーテンを作製しました。角の部分に、ゆとりを持たせる“まち”を施し何度か改良を重ね、最終的には前後2枚で出入口を確保するタイプに落ち着きました。寝床がフラットになるようにビールケースで高さを調整し、ムートンを敷きました(写真1)。足を伸ばして寝ることができるので、しっかり睡眠をとることができました(某ゲストハウスの硬いベットより数段寝心地が良いと自負しています)。



写真1. 手作りの車中泊仕様

＜車中泊して出会えた野鳥＞

車中泊により行動範囲がぐんと広がり、初めて見る野鳥の数が少しずつ増えました。例えばギンザンマシコ、カヤクグリ、ホシガラス、ツメナガセキレイなど。初めてクマタカを見たときは、その大きさに驚き、ピロードキンクロの独特の顔に思わず笑ひ、ハイド(野鳥観察舎)で粘ってクイナを見たときは「やったあ」と思わず叫び、感動的な出会いに満足しきりです。コマドリは何度か見えますが、遠かったり、茂みの中で暗かったり。しかし、ついに釧路で見たそれは、綺麗な声で高らかに囀り、美しい尾羽を上げた全身を目の前に曝してくれました。キアシシギ、キョウジョシギの群れ、200羽近くのカムリカイツブリの群れ、夏羽へ換羽中のユリカモメの群れ、どれもこれも苦勞してここまで運転してきて良かったと思える出会いの数々でした。

出かける前に大まかな予定は立てておきますが、野鳥の出方によっては変更します。経費節約のため有料道路は使わず、一般道をのんびり走ります。途中、タンチョウや亜種シマエナガが目に入ることがあります。後続車がないときは、車を端に寄せて停車して撮影します。早朝の探鳥に備え、夜は早めに就寝します。見たいドラマもファイターズの試合も、心を鬼にして。

＜ハジロクロハラアジサシとの出会い＞

エトピリカを見たいという思いから、今年7月、根室の落石クルーズ船の予約をしました。波が高くうねりもあり、船の上での撮影は至難の業でした。波間に漂う野鳥に合わせても船が揺れる。まともな写真は1枚もありません。ただ、岩場で羽を休めるチシマウガラス(写真2)だけは、スピードを緩めてくれたこともありなんとか撮影できました。目のまわりが赤いのが特徴の、初めて見る野鳥でした。図鑑でしか見たことのない野鳥を、自然の中で見ることができるのは、鳥見旅行の楽しみのひとつです。



写真2. チシマウガラス

せっかく根室まで来たので、少し足を延ばして野付半島まで行きました。ハイドでクイナが現れるのを待ちました。昨年8月上旬に来たときは見ることができましたが、今年は駄目でした。沼ではカイツブリが、餌を探して潜水していました。20羽くらいのウミネコが羽をばたつかせ水浴びをしていました。そんな中ウミネコより小さめで、スピード感のある滑空をしている2羽を発見しました。沼の上空を飛び回り、時にはハイドの方へ向って飛んできたり、水面すれすれに飛び一気に上昇していったり、細長い翼を巧みに動かし、素早い動きを見せていました。写真を拡大してみるとユリカモメとは違うような・・・見たことのない野鳥でした。魚を咥えている1枚もありました。

ネイチャーセンターで尋ねるとハジロクロハラアジサシ(写真3)の幼鳥とのことでした。道内で初めて見たいわゆる“沼アジサシ”。お目当てのエトピリカは見られませんでした。ハジロクロハラアジサシに出会えたのはラッキーでした。



写真3. ハジロクロハラアジサシの幼鳥

天気回復に合わせて、北上しました。オホーツク管内小清水町の止別駅の近くで20羽ほどの尾の長い野鳥が、電線に止まっていた。せわしなく飛び回るので撮影に苦労しました。鳴き声は亜種シマエナガのもの。でも顔に黒い模様があり、道内にも亜種エナガがいるんだと思いつきながら何枚か写しました。顔は成鳥の黄色ではなく、幼鳥の赤い色でした。北海道野鳥図鑑（亜璃西社）で調べると、亜種シマエナガの幼鳥は「黒褐色の眉斑があるので注意」とあります。「シマエナガ団子」ではありませんが、数羽が電線に止まっている光景（写真4）も撮れましたし、幼鳥の顔も初めて見ました。



写真4. 亜種シマエナガの幼鳥

その後、濤沸湖、能取湖、シブノツナイ湖を経て帰路につきました。シブノツナイ湖では、シマセンニュウをじっくり観察しました。早朝は人がいなかったのも、ゆっくりと動画に収めることもできました。途中雨で停滞した半日もありましたが、5泊6日1,185kmの旅を無事終えました。

<エトピリカとの出会い>

その後、8月まではエトピリカを見ることができるとい話なので、再び落石へ。7月より波が穏やかで揺れが少なく、快適なクルーズでした。それより何といても野鳥の多さに驚きました。ウトウ、ケイマフリ（写真5）、ウミガラス、ウミネコ、ウミウ、ヒメウ、チシマウガラスは前回同様姿を確認しました。ガイドさんが近づいてくる野鳥の名前を次々と連呼していきませんが、それに撮影が追いつきません。

「クロアシアホウドリが近づいてきます」（写真6）
 「9時の方向にフルマカモメ」
 「ミズナギドリの大群がいますね」
 「ハイイロミズナギドリ、オオミズナギドリも交じってる」
 「クロアシアホウドリがまた現れた。これは近い」
 「トウゾクカモメがウミネコの餌を狙って上空にいるよ」
 「今日はすごい、お祭り騒ぎだ」

ガイドイヤフォンから聞こえる声に夢中になって探して、シャッターを切る。どんな画像かなんて確かめる余裕もなく。

ミズナギドリの大群が去ったあとエトピリカ（写真7）が現れました。飾り羽のない幼鳥でした。でも特徴のあるオレンジ色の嘴はしっかりと目に焼きつきました。ウトウの幼鳥もありました。嘴の上についている突起がまだありません。コアホウドリとハイイロヒレアシシギは見逃しました。ラッコ、アザラシも前回同様見られ、今回はオットセイも顔を出しました。

海鳥観察は始めたばかりで、野鳥の名前と姿が一致し

ません。図鑑と写した画像を見比べながら頭の中にインプットしていきます。クルージングにもっと参加して野鳥の名前を覚え、識別ができるようになりたいと思います。



写真5. ケイマフリ



写真6. クロアシアホウドリ



写真7. エトピリカの幼鳥

<車中泊鳥見の勧め 同行者募集>

車中泊は自分のペースで、行きたいときに行きたい所へいつでも行けるという利点があります。しかし、長距離運転は神経を使います。天気予報を見ながら出発しますが、途中で雨に降られることもあります。その時は無理に走らず、車内で読書をしたり、縫い物をしたりして待ちます。

蚊が入ってくることもあります。車内で蚊取り線香を焚くわけにはいけないので、友達のアドバイスで電気式蚊取り器「ペープマット」を利用することにしました。エンジンをかければ電源が確保できるので、自宅で使っていたものが、この場面で重宝しました。

虫の死骸や鳥の糞はこびりついたら厄介です。手を汚さずに汚れを取るためにペットボトルに取りつけるスポンジを、100円ショップのお掃除コーナーで入手しました。レバーを切り替えると、スポンジに水が染み込み汚れを洗い流せる優れものです。問題解決のたびに、快適な車中泊となってきていることに満足を覚えます。

車中泊探鳥旅行の楽しさを共有したい方を募集します。特に海鳥に詳しい方、大歓迎です。

バードウォッチャーズ・スケッチブック

鬼平鳥見帳 ^{ひわ} 鶉の正体 マヒワ、カワラヒワ、ベニヒワ

札幌市中央区 本 間 康 裕

作家、池波正太郎さんの時代小説といえば、その季節感を表現するために、さまざまな料理が描かれているのはご存じのとおり。鬼平犯科帳、梅安、剣客商売の3連作に、それぞれ作中の料理を紹介した本が出ているくらいです。ところが池波さんが江戸の季節を表出しようとして描写したのは料理ばかりではないのです。実は多くの鳥たちが作品各所に顔を出しています。

早春の場面には「引き鶴が渡っていった」。春真っ盛りには「どこかで鶉が鳴いていた」。このほかにも鶉（もず）、みそさざい、雁、鶉（ひたき）などが出てきます。おそらく、江戸時代の文献などに基づいてはいるのですが、作家が幼いころに暮らした昭和初期の東京の自然が色濃く映し出されていると推察されるのです。しかし世の中に食いしん坊は多けれど、野鳥に興味を持つ人がそれほどいるとは思われません。池波作品の野鳥が料理ほど話題になることはなく、私がひとりで感心しているくらいです。

＜鬼平犯科帳 鳴く鶉はマヒワかカワラヒワか＞

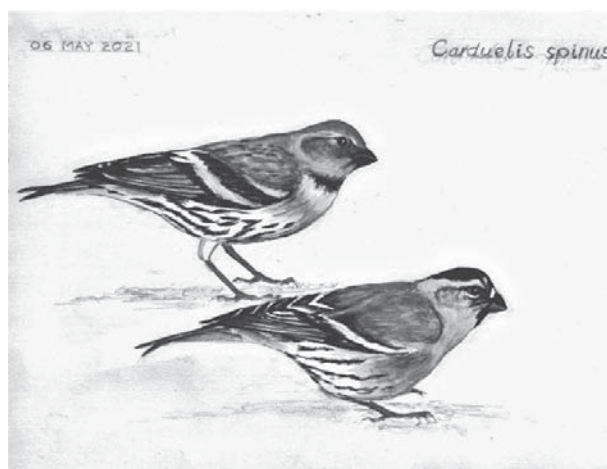
さて、今回、取り上げるのは「鬼平犯科帳」に登場する鶉（ひわ）です。まず、文庫版5巻目に収録の「凶賊」の一場面。この作品は火付盗賊改方長官、長谷川平蔵を親の敵と狙う凶賊、網切の甚五郎の暗躍を描いているのですが、大身旗本を装った甚五郎がにせの書状を送り、平蔵を呼び出すシーンに鶉が登場するのです。季節は秋、場所は清水門外の役宅、「平蔵は庭のどこかで鳴く鶉の声をうつろにきいた」とあります。

さらに文庫版20巻目の「寺尾の治兵衛」にも鶉を見つけました。この話は盗賊、寺尾の治兵衛が盗みを計画中に、狂人に襲われた少女を助けようとして殺されてしまう話です。治兵衛が死んだ後、火盗改メ方役宅で、密偵、大滝の五郎蔵が治兵衛から50両を預かっていることを平蔵に告白する場面に登場します。「大滝の五郎蔵が、はっとなった。奥庭でしきりに鶉が鳴いている」とあり、季節は「秋も終わろうとしていた」となっています。

では、この鶉はマヒワでしょうか、それともカワラヒワ？ それをちょっと考えてみましょう。もちろん、主人公、長谷川平蔵は実在の人物ですが、鬼平犯科帳はフィクションです。それを「考証」するのもおかしいものですが、そこは鳥好きの「趣味」としてお付き合いください。

まず毎回、お世話になる「図説日本鳥名由来辞典」をひもといてみます。鶉はマヒワ、カワラヒワ両方を指すとのこと。しかし、とくにマヒワのことであるといえます。では作中の鳥はどちらなのか？ うーん、いずれも

季節は「秋」と「秋の終わり」です。手元の図鑑ではカワラヒワは「九州以北で周年生息」とあり、マヒワは「冬鳥として渡来」とあります。冬鳥の渡来には、ちと早いと考えなければ、マヒワ、カワラヒワのどちらでもよいことになります。



マヒワ 2021.5.6

さらに調べると、鶉というのは、色の名前としても知られていました。福田邦夫さんという方（日本色彩学会会員の方だそうです）の「色の名前」（主婦の友社）という本では「鶉色」は「小鳥の鶉の羽毛のようなかなり黄色に近い黄緑色の色名である」。たしかにマヒワの雄の黄色い羽色は目立ちます。でも、かたやカワラヒワのほうも、翼にある黄色い斑が目立ちます。カワラヒワも黄色が特徴の鳥です。

しかし、この「色の名前」によると、鶉色のもとになった鳥は寒くなると日本に群れをなしてやってくるので、冬の到来を告げる使者として知られていたといえます。とすると、鶉＝マヒワと考えるのが順当なようです。

＜マヒワは池波正太郎の“青春の鳥”？＞

最後に俳句の世界ではどうかと、講談社の「カラー図説日本大歳時記」を見てみました。同書は監修、水原秋櫻子・加藤楸邨・山本健吉という1675ページに及ぶ大冊です。これによれば、鶉は秋の季語。「真鶉は普通に鶉と呼ばれ（中略）秋に大群で渡りをし、冬季を平野、山麓などで小群にわかれて過ごす」とあって、説明文にはまごうことなきマヒワの写真が添えられています。

どうやら、冬を迎えようとしている火盗改メ役宅で鳴いている鳥としては「周年生息」しているカワラヒワではなく、「冬の使者」のマヒワのほうが作品の雰囲気

合っているし、季節感を的確に表しているように思えてなりません。作者、池波さんは俳句にも造詣が深かったので、ここは「大歳時記」のいう「真鶉」に軍配を上げたくります。

では、東京周辺にマヒワは多いのでしょうか。最近の関東地方の探鳥地ガイドをざっと見ると、出現する鳥としてカワラヒワをあげている場所はいくつかありますが、マヒワが観察できると勤めている探鳥地は見当たりません。そして、鳥類学者の黒田長久博士の「カラー歳時記 鳥」（保育社）によれば、マヒワの項に「武蔵野には近年少なく、ただ昭和32年から33年（1957～58年）冬には多く渡来した」とあります。この本、1967年の初版。どうやら「近年少なく」なったマヒワは、1923年生まれの池波さんにとって、若いときによく見た“青春の鳥”だったような気がします。



カワラヒワ 2018.8.11

さらに江戸時代のマヒワの渡来状況はどうだったのでしょうか。松田道生さん（あのNHKラジオ夏休み子供科学電話相談で有名）の「大江戸花鳥風月名所めぐり」（平凡社新書）のなかに江戸の鶉についての記述を見つけました。以下、同書を孫引きすると…

江戸時代末期の江戸の町の様子を記録した「絵本江戸風俗往来」に「小鳥狩」なるものが紹介されており、そこに「冬季に至る目白・ひめ・あとり・ひわ その他の種々なる小鳥飛び来るは～」と書かれており、松田さんは「ひわ」を留鳥のカワラヒワではなく冬鳥のマヒワではないか、と推測しています。

そして「現在、東京都内でマヒワを見ることはたいへん少なく、私は見たことがありません。ただし、マヒワは年によって渡ってくる数の差がたいへん大きな鳥です。（中略）かつては、当たり年が続いたことがあったのでしょうか」と書いています。なので、鬼平の役宅の鶉はマヒワとみていいのではないのでしょうか。

ともあれマヒワの絵のデータを掲げておきましょう。札幌市内の旭山記念公園で2021年5月6日に見かけたものです。黄色の鮮やかさがひととき目にしみます。なお、カワラヒワの絵は2018年8月11日に札幌市中央区のわが家の向かいの空き地にきたものです。



ベニヒワ 雌 2021.2.13

ところで、鶉といえば、ほかにも主に北海道に飛来するベニヒワがいます。前出、松田さんの「大江戸～」にはベニヒワも出ていました。「武江産物志」（江戸の物産を書いた本。武江とは武蔵国江戸のこと）に「鶉 ぬかひわ べにひわ 四谷」と列記されています。松田さんは「ぬかひわ」がベニヒワ、「べにひわ」はベニマシコではないかと推測しています。なので鬼平の鶉がベニヒワだった可能性も（わずかながら）あることを付記しておきましょう。



ベニヒワ 雄 2021.2.17

というわけで、おまけでベニヒワの絵も載せておきます。雌は2021年2月13日に札幌市のJR桑園駅近くのシラカバ並木で見たものです。こんな市街地にもいるんですね。この時は1羽だけで、しきりにシラカバの種子をつついていました。駅に通じる並木道は多くの人が通るのですが、その人たちは鳥がいることに気づかず、鳥もまったく気にせず、せわしく歩く人の頭上にはらはらとシラカバの種子が舞っていました。一方、雄のベニヒワは2021年2月17日の札幌市の真駒内公園です。この冬の真駒内は“ベニヒワ祭り”で、木に群がっていました。桑園駅とは打って変わって、人の方もカメラマンが押すな、押すな状態で、盛んにシャッターを切っていました。でも、あれはベニヒワ目当てじゃなくて、一緒にいた人気のエナガ（亜種シマエナガ）を狙っていたのかな？

（イラスト筆者）

札幌市内 毎年観察されるキマユムシクイ

北大野鳥研究会 千葉 利久(農学院) 内田 耕平(理学部) 和賀 大樹(理学部) 川森 日向(水産学部)

キマユムシクイは体長10cm、「チー・チュイ・チー」という囀りが特徴的な、いわゆるムシクイの一種です。旅鳥として日本海側の島嶼を中心に渡来し、日本鳥類目録第7版でもキマユムシクイは北海道を旅鳥として通過するとされています。しかし、北海道内における記録で公表されているものは少なく、たとえば北海道鳥類目録改訂4版およびその補遺で4例(羽幌天売1992年10月、稚内1989年5月、北広島市富が丘2008年10月、札幌北大構内2013年5月)が掲載されているのみです。北大構内での記録報告は北大野鳥研究会の当時の会員によるもので(三ツ橋 2013)、その文中でもまれな記録であるとされています。なお、北広島での記録はこの報告中に書かれています。

私たちは北大野鳥研究会のメンバーとOBで、そんなキマユムシクイを近年札幌市で多く観察しています。今回は、2020年以降の記録をご紹介します。



キマユムシクイ 2021.5.8 北海道大学構内
雨覆の2本の翼帯、淡黄色で明瞭な眉斑などが特徴

2020年から2022年にかけての、私たちの札幌市内におけるキマユムシクイの記録を右の表にまとめました。年により記録数の変動はあるものの、市内の公園などを毎年一定数が通過しています。記録場所に偏りがありますが、これは私たちが観察に出かけているエリアでの記録であるためで、これ以外の公園なども通過しているのではないかと考えています。札幌市以外でも石狩市、後志管内積丹町などで同時期に何度も確認しており、島嶼部だけでなく、日本海側を中心に北海道本土を毎年春に一定数が通過していると考えられます。観察される環境としては広葉樹林が多く、樹冠で細かい移動を繰り返しながら囀る姿を確認することがほとんどです。一方で、秋については札幌周辺で観察したことはありません。葉が繁り、また囀らないため見つけにくいことなどが理由とを考えています。しかし、北海道鳥類目録には秋の記録も2例記載されており、春と同様に市内の公園を通過している可能性があります。

これまで比較的まれとされてきたキマユムシクイですが、その理由の一つとして、毎年通過していても多くが見逃されてきた可能性があると考えています。声のみで確認することも多い本種は、声を聞き逃したり、他の種として誤った同定をされたりすることによって記録が取りこぼされているかもしれません。キマユムシクイをはじめとする外見での識別が難しい種は、その種を識別できる観察者の存在が記録の増加に大きく関わると考えています。もしこの記事を読み、来年の春以降にキマユムシクイの存在を意識して探す方が増えれば、もっと広い地域から多くの記録が集まるかもしれません。

キマユムシクイは大きさも小さく、パッと見てそれとわかるような特徴も少ない、識別がやや難しい鳥です。羽色や形態による識別点は雨覆の2本の翼帯など様々ありますが、やはり最も特徴的なのはその声です。冒頭でも触れましたが、キマユムシクイの囀りは「チー・チュイ・チー」という3音節で構成されたわかりやすいものです。また地鳴きもその囀りの1音節に近い「チー」という声で、覚えてしまえば比較的楽に識別できます。インターネット上にも声を含む動画が多くアップロードされていますので、それらの動画や図鑑を参考に来年の春以降、ぜひお近くの公園や森でキマユムシクイを探してみたいでしょうか。

札幌市におけるキマユムシクイの記録 (2020～2022)

日 時	区	観察場所	個体数
2020/5/7	豊平区	豊平公園	1
2020/5/8	中央区	円山公園	2
2020/5/15	中央区	円山公園	2
2020/5/17	北区	北大	1
2020/5/18	北区	北大	1
2020/5/28	北区	屯田(住宅地)	1
2021/5/8	北区	北大	1
2021/5/13	豊平区	豊平公園	3
2021/5/14	北区	北大	1
2021/5/18	北区	北大	2
2021/5/27	北区	北大	1
2021/6/1	北区	北大	1
2022/5/1	中央区	中島公園	1
2022/5/10	北区	北大	1

引用文献

- 日本鳥学会 2012. 日本鳥類目録改訂第7版
 藤巻裕蔵 2012. 北海道鳥類目録改訂4版
 藤巻裕蔵 2021. 北海道鳥類目録改訂4版の補遺
<http://bonasa4979.sakura.ne.jp/list.html>
 三ツ橋圭 2013. 北海道野鳥だより173



石狩川河口、いしかり調整池の
シギ、宮島沼のガン、室蘭・測量
山のタカなど、この季節の渡りを
楽しむ探鳥会となりました。

石 狩 川 河 口

2022. 8.21

札幌市豊平区 大西 智子

昨年の3月入会して約1年半になります。昨年はほぼ中止だった探鳥会が今年は通常開催になり楽しく参加しています。カメラを持って野幌森林公園に花の写真を撮りに行っていて、そこでフクロウの巣立ちを見たのが鳥に興味を持ったきっかけでした。その後、シマエナガの愛らしさも知り、会えるかもしれない円山公園や真駒内公園で鳥探しするようになりました。それで先に入会していた友人に誘われ北海道野鳥愛護会に入会させていただきました。



砂浜にいたトウネン2羽 筆者撮影

ハマナスの丘公園は毎年行っていますが、砂浜沿いに歩いたのは初めてでした。歩き出す前に言われた「良い写真が撮れるかもしれませんが」に期待が膨らみます。鳥の群れがさぁと飛んで行きました。もう少しゆっくり見たかったな—と思いました。その後でトウネンが2羽、みぎわ近くにゆったりしていたので、しっかり覚えたと思います、多分（笑）。ピンボケでも写真を撮り、帰ってから確認して鳥の名前を覚えるようにしていますが、覚えた端から忘れてしまいます。遠くの鳥を見つけ、何度も親切に教えていただける皆さんにとっても感謝しています。

野の花に詳しい方に戻り道で「メドハギ」の名前と、「ネジバナ」の咲く場所も教えていただきました。花と鳥の両方を楽しめてとてもラッキーでした。

今回は増水のため途中で引き返したのがすごく残念でした。少々物足りなかったもので、帰路にいしかり調整池に寄ってみました。ダイサギやアオサギ、シギ類がいて、そこにも会の方がいらしてお話を聞かせていただけました。

皆さんが見つけた鳥を教えていただきながらの参加で

す。一度でも真っ先に「ほら、あそこに…」なんて言えるようになればと思うのが、高すぎる目標です。

【記録された鳥】カンムリカイツブリ、カワウ、ウミウ、アオサギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、コムドリ、ノビタキ、カワラヒワ、ホオアカ 以上16種

【参加者】市橋栄二、臼井明夫、臼田 正、大表順子、大西智子、鎌田要子、川端 純、北山政人、國本昌秀、小島俊幸、小谷内久江、佐川建次、佐藤 勉、新城 久、杉山次郎、高島 均・明美、高橋きよ子、竹田芳範、田辺英世、辻 雅司・方子、西尾京子、西窪翠子、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、福士一徳、丸島道子、丸勢文現・亜希子、武藤幹太・大翔、本杉政司・朋子、吉田慶子 以上36名

【担当幹事】臼田 正、新城 久

鵲 川 河 口

2022. 8.28

探鳥コース途中にある橋が流失したことから中止。

い し か り 調 整 池

2022. 9. 4

江別市 武藤 大翔

探鳥会は今回で5回目です。僕は鳥が好きです。オグロシギ、ヒバリシギ、ここでは珍しいタシギなどたくさんのシギが見られましたが、気になった鳥は、一緒に空を飛ぶオジロワシとチュウビです。



タシギ 武藤幹太さん(筆者の父)撮影

僕が鳥を好きになったのは、「サバイバル」という本を読んだからです。鳥シリーズでハヤブサやインコなどの鳥に興味を持ったからです。探鳥会では1回目の宮島沼、2回目の厚別川、3回目の福移小中学校近くの河川敷、4回目の石狩川河口の海岸、そして今回のいしかり調整池の5つにはたくさんの鳥がいたことを知れてとても嬉しかったです。

1回目の宮島沼では、ハクチョウやマガンなどがたくさんいたことにびっくりしました。2回目の厚別川ではトビやアカゲラ、ホオアカなどがいてすごくいい眺めでした。3回目の福移小中学校近くの河川敷ではオジロワシやベニマシコなどがいて、とても感動しました。4回目の石狩川河口の海岸では海の鳥や陸の鳥が群れていて、その中で可愛い鳥が印象に残りました。今回のいしかり調整池ではイソシギやチュウヒなどがいて、どれもいい鳥達でした。特に僕が一番好きだった鳥はオジロワシとホオアカです。



チュウヒ(左)とオジロワシ 武藤幹太さん撮影

僕が通っている新篠津高等養護学校の図書室にある鳥の本をお父さんのために2回借りています。僕も同じ本を2回借りてちょっとだけ読んだことがあります。僕も鳥の本をまた借りて「もっと鳥のことを詳しくなりたいな」って思いました。僕は、ノスリ、ホオアカ、オジロワシ、イソシギなど、本の中の鳥を半分覚えました。

望遠鏡を持っている人にお願いをすると、姿の分からない鳥を見せてくれるのでとても嬉しいです。僕は鳥を探す時にいつも双眼鏡を持って行きます。それを使って鳥を見つけています。4回目の時にもらった鳥の資料とシマエナガのバッジ、今も大事にしています。2回目の厚別川でノビタキの幼鳥が可愛かったことが印象に残っています。僕は探鳥会に行けてとても良かったです。探鳥会に参加しているみなさん、色んなことを教えていただきありがとうございます。

また行きたいです。

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、カンムリカイツブリ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、ヘラサギ、タシギ、オグロシギ、コアオアシシギ、アオアシシギ、タカブシギ、ソリハシシギ、イソシギ、トウネン、オジロトウネン、ヒバリシギ、エリマキシギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ノスリ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ 以上36種

【参加者】 阿部真美、石塚 肇・鈴子、今村三枝子、臼田正、大表順子、大垣 創、川端 純、木内勝敏、岸谷美恵子、北山政人、木下 茜、木下由美子、草間峰子、國本昌

秀、栗林宏三、小島俊幸、小林敦実・恵、小谷内久江、近藤章子、白澤昌彦、新城 久、杉山次郎、鈴木幸弥・順子、高島 均、高橋良直、高屋敷征子、辰巳研一、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、綱島詔雄・征子、當木健一・きち、鳥谷峰 修・由紀・心、中田勝義、成田京子、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、樋口孝城、平澤路生、藤田 潔、武藤幹太・大翔、本杉政司・朋子、吉田慶子 以上54名
【担当幹事】 新城 久、樋口孝城

野幌森林公園

2022. 9.11

コロナ対策の短縮(冬)コースを夏コース(一部短縮)に戻しました。木々の葉もまだ青々と繁っていて、鳥を探すのが難しい時期です。大沢の池で、成長したカイツブリの幼鳥、カワセミを見つけて締めくくることができました。



成長したカイツブリの幼鳥 早坂泰夫さん撮影



カワセミ 中村 隆さん撮影

【記録された鳥】 オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、カイツブリ、キジバト、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ゴジュウカラ、キビタキ、アオジ 以上20種

【参加者】 板谷輝美、市橋栄二、今村三枝子、大垣 創、小西美美枝、佐川健次、佐野純子、杉山次郎、高橋貞夫、辻 雅司、道場 優、富川 徹、鳥谷峰 修、長尾由美子、

中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、福士一徳、藤田 潔、辺見敦子、松原寛直・敏子、宮東久美子、横山加奈子、吉田慶子
以上25名

【担当幹事】辻 雅司、横山加奈子

宮 島 沼

2022. 9.25

札幌市南区 古井 靖子

野鳥観察を始めて半年弱。まだ野鳥の種類や鳴き声も日々勉強中です。時間があれば公園で野鳥散策をしておりますが、双眼鏡で鳥を捉えるのにも苦戦している初心者です。探鳥会とはどのようなものなのかと、以前から関心があり、この度初めて参加させていただきました。

宮島沼に来るのも初めてで、駐車場に着くとダイサギがすぐ後ろの農地に降り立ち、近くで見られました。沼に向かって歩く先からたくさんの鳥の鳴き声。上空にも群れをなし飛んでるマガンを見ながら集合場所に。

沼にはマガン、ヒシクイ、シジュウカラガン、オオバン、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ダイサギ、アオサギなど。こんなにたくさんの水鳥を見たことはありません。望遠鏡から覗かせていただいたカンムリカイツブリの幼鳥の顔のウリ模様が印象的でした。



マガンとシジュウカラガン (右下) 武藤幹太さん撮影



カンムリカイツブリの親子 早坂泰夫さん撮影

鳥を見ていたら時間も忘れ1時間半の探鳥会はあっという間に終了。最後に鳥合わせをして解散となりました。30種類の野鳥の名が挙がっていました。一人で見ると野鳥もよいですが、大勢で見る探鳥会はいろんな発見があり掛け声も賑やかで楽しかったです。

野鳥との出会いは一期一会。自然に生きる野鳥に出会えたことに感謝。そしてお世話になった会の皆さんに感謝しながら、初の探鳥会は終了しました。機会があればまた参加したいと思います。ありがとうございました。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、スズガモ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、オオバン、トビ、チュウヒ、ハイタカ、ノスリ、チゴハヤブサ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ハクセキレイ、カワラヒワ、アオジ 以上30種

【参加者】阿部真美、石塚 肇、今村三枝子、白田 正、大表順子、大垣 創、川端 純、北山政人、國枝淳子、栗林宏三、小谷内久江、齊藤潤太郎・律子、佐川健次、佐藤ひろみ、杉山次郎、鈴木幸弥・順子、高島 均、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、富川 徹、中田勝義、中村俊太郎、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、平澤路生、古井靖子、丸勢文現・亜希子、南 貴和子、武藤幹太・大翔、本杉政司・朋子、吉田慶子 以上39名

【担当幹事】北山政人、佐藤ひろみ

い し か り 調 整 池

2022.10. 1

9月4日の探鳥会と比べてダイサギなどのサギ類が少なくなりました。シギチドリ類はこの時期に多いツルシギ、珍しいアメリカウズラシギなど8種、猛禽もハイタカ、オオタカ、ハヤブサを観察できました。



ツルシギ 田中 陽さん撮影

【記録された鳥】マガン、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、コチドリ、オグロシギ、ツルシギ、コアオアシシギ、アオアシシギ、

タカブシギ、アメリカウズラシギ、エリマキシギ、トビ、
ハイタカ、オオタカ、アカゲラ、ハヤブサ、ハシボソガラ
ス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバ
リ、ムクドリ、ハクセキレイ、カワラヒワ 以上29種



アメリカウズラシギ 辻 雅司さん撮影

【参加者】阿部真美、川端 純、岸谷美恵子、栗林宏三、
小島俊幸、小林敦実・恵、小谷内久江、近藤章子、佐川健
次、佐野純子、杉山次郎、高橋きよ子、滝川英俊・美子、
田口精一・麻衣子、田中 陽・雅子、玉置 顕、辻 雅司・
方子、辻本睦美、中村俊太郎、畑 正輔、浜野チエ子、早
坂泰夫、樋口孝城、本間康裕、道川富美子、吉田慶子

以上31名

【担当幹事】樋口孝城、道川富美子

野 幌 森 林 公 園

2022.10.9



オオアカゲラ 小谷内久江さん撮影

解散場所を大沢園地から出発地の大沢口に戻し、夏コー
スを完全に復活させました。クマゲラの声が聞こえ、飛翔
し木にとまる姿が一瞬見られました。また、オオアカゲラ
をじっくりと観察できました。

【記録された鳥】ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、コガモ、
キンクロハジロ、カイツブリ、トビ、オオタカ、コゲラ、

オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシブト
ガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカ
ラ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ゴジュウカラ、アオジ
以上23種

【参加者】会川 隆、青木あけみ、石井克文・浩子、市橋
栄二、今村三枝子、國本昌秀、小西美美枝、小林敦実・恵、
小谷内久江、嵯峨義輝・弥生、佐川健次、杉山次郎、滝川
栄作・美子、辻田捷紀、辻本睦美、道場 優、鳥谷峰 修、
中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、廣井ひろみ、広中洋子、
福士一徳、松原寛直・敏子、水上正幸、南 貴和子、武藤
幹太・大翔、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 以上36名

【担当幹事】道場 優、畑 正輔

測 量 山 唐 松 平

2022.10.16

千歳市 田口 麻衣子

10月も半ばだというのに気温16度と暖かく晴れやかなま
さに鳥見日和でした。集合場所の測量山・唐松平に到着
早々、数羽のタカ類が頭上をかすめました。特にノスリが
比較的近く、うっすらとわかるシルエット。「これは幸先
がいいな」と予感。

定刻になり観測場所の頂上へ向かうことに。距離400m
ほどと聞きましたが、急傾斜した舗装道とこれまた急勾配
の階段。私にとっては、ちょっとした軽登山のようでした。

ひいこら言いながら登っていると「ミヤマガラスだよ」
という声。数十m先にカラスの集団がひとかたまりになっ
て飛んでいるようにしか見えません。が、一般的にカラス
(ハシボソやハシブト)は、そのような飛び方をしないと
か。くう～残念！ もう少し近くで見たかったですね。



渡っていくミヤマガラス 辻 雅司さん撮影

やっとの思いで目的地に到着。上空を見上げると薄い青
空にクモ雲くも…はるか水平線にはガスがかかり、対岸に
見えるはずの渡島管内森町や駒ヶ岳はもやに覆われていま
した。空をぐるりと見まわしていると1羽、2羽、また数
羽とタカラしき物体が雲を横切り集まってくるではありま
せんか！ 彼らはぐるぐると上昇し雲に吸い込まれていき
ました。これが鷹柱というものなのかと写真も撮らず、すっ

かり興奮してしまいました。しかし、残念な私の眼にはタカの判別ができず、会の方に教えていただきました。主にオオタカ、ハイタカ、ノスリ、ツミなど。ツミはカメラの液晶画面の写真でも確認してもらいました。初ツミ！です。



ツミ 北山政人さん撮影

チゴハヤブサもいたかな？ほかに遠くの岩にハヤブサがとまっていたり、海の方にはミサゴがいたり“鷹祭り”



ハイタカ 田口精一さん
(筆者の夫) 撮影

でした。
こんなにたくさんのタカを短時間で見る機会はなかなかないでしょうね。
これから彼らは越冬地を目指して過酷な旅をする。また北海道に来てくれるだろうか？そんなことを思いながら羽ばたく姿が雲に消えるまで呆けたように見つめていました。来年こそタカたちの雄姿をしっかり撮ろう…



ノスリ 田口精一さん撮影

【記録された鳥】スズガモ、ウミウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ミサゴ、トビ、チュウヒ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、チゴハヤブサ、ハヤブサ、ミヤマガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ゴジュウカラ、カワラヒワ 以上24種

【参加者】伊藤聖子、井上知穂子、臼田 正、川端 純、北山政人、草間峰子、國本昌秀、栗林宏三、小林敦実・恵、小谷内久江、齊藤 桂・蓮、齊藤潤太郎・律子、杉山次郎、高島 均・明美、田口精一・麻衣子、辻 雅司・方子、鳥谷峰 修・由紀・心、中田勝義、畑 正輔、早坂泰夫、平澤路生、福富みどり、南 貴和子 以上31名

【担当幹事】臼田 正、北山政人

野 幌 森 林 公 園

2022.11.6

冬鳥はウソの鳴き声を確認しましたが、ツグミ、マヒワ、アトリなどは見られませんでした。カラ類の混群の中にエナガが入っていて楽しめました。大沢の池ではホシハジロなどを観察しました。



木の葉も散って見やすくなった大沢の池

【記録された鳥】マガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カイツブリ、トビ、ノスリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ウソ 以上22種

【参加者】阿部美子、荒木良一、石井克文・浩子、大表順子、大西智子、奥村七織子、國本昌秀、栗林宏三、小西美枝、小谷内久江、斎藤亜矢子、佐賀テエ子、杉山次郎、高島千尋、竹内 強、辻 雅司・方子、中村 隆、西窪翠子、畑 正輔、早坂泰夫、福士一徳、辺見敦子、細川 望、前寺博篤・恭代、松原寛直・敏子、水上正幸、南 貴和子、本杉政司・朋子、元谷千鶴子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 以上37名

【担当幹事】竹内 強、早坂泰夫



1月22日の小樽港探鳥会(バス利用)は、新型コロナウイルス感染症の感染防止の観点から中止します。ほかの探鳥会は実施予定ですが、感染状況で中止の場合があります。中止の告知は当会ホームページに前日夜までに掲載しますので、確認をお願いします。

【野幌森林公園】2023年1月8日(日)

今年度に新設した1月の野幌森林公園探鳥会です。新年の雪を踏みしめながら鳥を探します。コースは冬コース(エゾユズリハコース・志文別線・大沢コース・桂コース)です。カラ類やキツツキ類とキレンジャク、ツグミ、アトリ、シメ、マヒワなどの冬鳥を観察しますが、エナガやキクイタダキなどに会えるかもしれません。正午ごろに大沢口に戻り、鳥合わせをして解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00
交 通：JRバス 新札幌発(文京台循環線)
「文京台南町」下車 徒歩10分

【野幌森林公園】2023年2月5日(日)

厳冬期の野幌森林公園でキレンジャク、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥、キツツキ類、カラ類などを観察します。正午ごろに大沢口に戻り、鳥合わせをして解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00
交 通：JRバス 新札幌発(文京台循環線)
「文京台南町」下車 徒歩10分

【円山公園】2023年3月5日(日)

春間近の円山公園で、アカゲラやコゲラなどのキツツキ類、シジュウカラなどのカラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。午前中に集合場所に戻り、鳥合わせをして解散となります。

集 合：円山公園パークセンター前 9:00
交 通：地下鉄東西線円山駅下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】2023年3月19日(日)

北の繁殖地に渡っていく、ガン・カモ類やオジロワシ、オオワシなどを観察します。湖畔をネイチャーセンターまで歩きます。正午ごろネイチャーセンターの駐車場で鳥合わせをして解散となります。

集 合：ウトナイ湖野生鳥獣保護センター前 9:30
交 通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)
「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆防寒具、雨具、観察用具筆記用具などお持ちください。
☆悪天候で中止の場合があります。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-876-8546
10:00~16:00(土日、祝日を除く)

鳥 民 だ よ り

◆新年講演会の中止について◆

新年講演会は新型コロナウイルス感染症防止の観点から中止します。

【新しく会員になられた方々】

浦野真理子(札幌市厚別区)
成田 光子(札幌市厚別区)
奥村七織子(千歳市)

◆「探鳥会ほうこく」写真と「会員一筆」募集◆

「探鳥会ほうこく」では、その日の探鳥会で会員が撮った写真を掲載しています。皆さんの写真をぜひ編集部までお寄せください。また、鳥との出会いや思い出など、会員皆さんの短文「会員一筆」を随時募集しています。写真1枚を添えて600字以内、メールでお寄せ下さい。

宛先はいずれも dayoriaigo@gmail.com

表紙の鳥

カンムリカイツブリの幼鳥



カンムリカイツブリは、手元の図鑑には「数少ない旅鳥または冬鳥」「道内での繁殖例がない」と記載があります。それが近年では数か所で繁殖が確認されているそうです。去年は美瑛市の宮島沼でも繁殖したことを知り、今年もまた9月25日の探鳥会の日に親子仲睦まじい姿を観察することができました。

地球温暖化の影響なのかどうか、野鳥の生態が大きく変化していることに今更ながら驚きます。写真の幼鳥は、親鳥と一緒にいたところから単独で飛び立ったもの。慌ててシャッターを切ったのでピントは合っていないのですが、力強い飛翔のようすが伝わってくるお気に入りの一枚となりました。

札幌市清田区 高島 均

(編集部より カラー写真は当会ホームページでご覧ください)

【北海道野鳥愛護会】年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38 北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 ☎(011)876-8546

HPのアドレス <https://aigokai.org>